

# 仙台教区報

発行所 カトリック仙台教区事務所  
 980 仙台市本町一丁目2番12号  
 電話〇二二二一七三七七番  
 編集・発行人 三浦 平三

## 青少年育成は全信者のつとめ

### 今年も各地で夏期合宿盛んに▽

東北はことしもなかなか暑い夏がやって来なかつた。それでも夏は活動の季節、教会も例外でない。黙想会、練成会、研修会などが盛んに行われる。とくに夏休みを利用した子どもたちの合宿は年中行事で、仙台教区でも各地区、各小教区教会が教会学校や小、中、高校生のキャンプなどを催した。

#### 世話役のご苦労に感謝

こうした行事では世話役の苦労は大きい。リーダーや裏方をあずかる司祭、修道女、信徒の皆さんがたに心から感謝しないとならない。さいきん、地域社会での子どもたちの野外活動が出来ないという。例の子ども事故の責任を問われた、教育ボランティアの賠償判決の影響だといわれる。つまりそれほど責任の重い仕事なのである。

しかしそれでも、次代をになり青少年育成のためのこうした行事をやめるわけにはゆかないだろう。とくに教会は、将来神の国をよ

り発展させてゆくため、優秀な人材の育成を欠くことができない。夏期合宿行事にはこうした速大な目的もあるから、なおさらリーダーや世話にあたる方たちの努力、そして協力が期待されるのである。

また当然のことだが、教会にとって大事なこうした行事が円滑に行われ成果をあげるためには、小教区教会や地区を挙げた協力がのぞまれよう。実際に各地で、教会や信者同士の協力が見られることはうれしい。このような協力はやがて合宿などの行事を越え、教会全体の活動へと実を結んでゆくことになる。希望は大きくふくらんでゆくのである。

#### 福音による配慮が必要

具体的な青少年育成の方法となれば、それに関連する夏期合宿についても、それぞれリーダーや世話役の計画にしたがうことはいくらまでもない。教会だからといって一般にいわれる青少年育成と全く異なるものでもなく、

特別なクリエーションもないのだから。しかし教会の場合は必ず、福音にしたがった人間教育、そうした知識の習得が祈りの実践とともにつけ加えられるべきである。あくまでも神の子としての青少年の成長、私たちの場合には、すべてその観点から配慮されなければならぬ。

#### 私たちみんなの青少年だから

すべての信者は、小教区教会などでの青少年、子どもたちの行事や活動を、有志や一部の人のものと思うべきではない。親や家族の立場から考えるなら、誰もが理解し協力しないではいられないだろう。私たちはみな神における兄弟姉妹なのである。教会全体の、しかも重大なことに認識されるなら、青少年育成の活動はさらに活発になり、成果をあげるのである。教会が生き生きするのである。

~~~~~

#### 司教日程

(8月12日現在)

- 9月5日 教区司祭団役員会
- 6日 宮宗連報編集委員会(仙台)
- 13日 中央協・会計研修会(東京)
- 15日 福島県カトリックの集い(福島)
- 19日 仙台OK役員会(仙台)
- 20日 男女修道会合同役員会(東京)
- 21日 スペルマン病院理事会(仙台)
- 23日 教区司牧評議会(仙台)
- 25日 青森県宣教百年記念式典(青森)
- 26日 教区司祭団月例会(仙台)
- 10月3日 教区司祭団役員会(仙台)



平和旬間に司教団メッセージ

理解する努力が今の課題!

8月6日から15日までの10日間は、日本のカトリック教会の平和旬間。先日、日本司教団から「平和のために働く人は幸いである」というメッセージが、全国の小教区教会や修道院に送られて、信者一人ひとりに平和のため働くようつよくのぞまれた。

昨年からはじめた平和旬間について、正直のところ多くの教会が具体的実践に戸惑っているようだ。信者数の少ない教会では、まともに何をすることがとても困難だからである。しかしうれいことに、司祭や信徒がつよい関心を持っている教会は、そのための具体的行動を実践している。

これから仙台教区としてまずしなければならぬことは、具体的実践を目ざして(あるいはその支援をめざして)、平和の問題を十

分理解することの努力であろう。今回の司教団メッセージは、私たちにそのことを教えている。聖堂内での一回の朗読にとどめず、もういちど自分で読み返してみるとか、何人かの信徒同士で話し合うとか、教会の会合で取り上げるかして、メッセージを生かすように努めてほしい。

司教団司牧教書

「平和の望み」



前記メッセージの中にもふれているが、日本司教団は平和についての司牧教書「平和の望み」を7月9日付で発表した。全文は7月31日のカトリック新聞第二七六号に掲載されている。また同ページには、この司牧教書に影響を与えたと見られる、全米司教団の、「平和と戦争に関する教書」の要約抜粋もあるので参考になろう。これらはすべての信者が目を通すべき重要な資料である。

アムネスティ署名運動に

協力を要請 - 日本司教団

司教団が今回、これほど平和のために発言したことは画期的といえる。平和旬間の設定もそうだが、教皇訪日での平和アピールに答えたものであることはいうまでもない。そして現代世界において人間が最も関心をそそぎ、努力しなければならぬそのものだからである。司牧教書は、「核戦争の脅威」から説き、「真の平和へ」の私たちの具体的な行動の示唆に及んでいる。それは教皇ヨハネ・パウロ二世の望みであり、信者の義務である。自分および周囲の人のために祈るということにつけ加えて、全世界の人びとがこの世でも神のみ旨にしたがって幸福であるよう、具体的に行動してゆくことが望まれる信仰の態度にほかならない。そのことをよく理解しよう。

仙台教区では年間司牧目標として、昨年度はとくに「家庭の平和」を働きかけた。教会にとつて家庭の福音化はきわめて大切なことであり、教皇庁はそのため家庭評議会をさ

聖年は家庭福音化の好機

きん新設した。

同評議会は今回、今年の特別聖年が家庭の福音的刷新とキリスト教的養成の課題を実践に移すよい機会として、いくつかの提言を準備

教皇庁家庭評議会が提言

9月23日の教区司牧評議会を取り上げ、この問題の啓もうと具体的実施を検討することにした。また教皇は明年3月25日を「聖年家庭の日」とされた。

教区では取りあえず

アムネスティ・インターナショナル日本支部から各小教区教会あてに、「すべての良心の囚人に全面的恩赦を求め署名」への協力が願われている。この署名は人権尊重の声を世界各地から盛り上げるもので、12月に国連に提出されることになっている。今回、日本支部から日本司教団の白柳誠一大司教に協力要請があり、各教区での協力がのぞまれた。署名は各人の自由であるが、趣旨を理解して御協力下さるよう。アムネスティとは、人権尊重の立場から、良心の囚人と認められる者の特赦運動をする国際団体である。

準備すすむ青森県信徒大会

9月25日、青森市の星高校で

青森市のカトリック宣教百周年を記念する青森県信徒大会は、同時に今年の特別聖年の行事を兼ね、きたる9月25日、青森市浪打の青森明の星高校を会場に盛大に催される。現在、実行委員会が中心に着々準備をすすめているが、プログラムの大要は次の通り。

10時開会(受付は9時より)

10時30分 佐藤千敬司牧の共同司式ミサ

12時 宣教百周年を祝う祝賀会。青森宣教に力のあつた宣教会、修道会に感謝状贈呈。

12時30分 記念講演―日本宣教司牧センター所長佐々木博神父。

14時30分 一旦閉会。

15時より巡礼。指定教会の本町教会まで3キロメートルをあるく。

なお実行委員会ではこのほか百周年を記念するトラビスト、函館巡礼(実施)、街頭募金(世界の困窮者のため)、新聞へのPR、などを企画している。

司教、カリタス・ジャパン担当に

司教協新人事でさまる

さる7月の司教協議会定例総会で、中央機構の改革とそれに伴う新人事が発表された。教区長佐藤千敬司教は今回の人事で、財務司教委員会委員長、男女諸修道会・宣教会担当司教(いずれも留任)。社会司教委員会に新設された人権福祉委員会の委員として、カリ

タス・ジャパンを担当する。教区司牧のほか神学校関係の仕事も加わってますます上京の回数が増えることになる。

なお、宣教司牧センターに向向している佐々木博神父は今回の人事で、中央協議会事務局企画部長を兼任することになった。

宮古教会、釜石と合同堅信式

夏は海浜学校がにぎやか

さる7月17日、宮古教会において釜石教会・宮古教会合同の堅信式が行われた。今回は特別聖年の行事のひとつとして行われ、久しぶりで宮古教会を訪れた佐藤千敬司教より、17人の信徒が堅信の秘跡を受けた。

また宮古教会は7月30日から8月2日まで盛岡の教会学校と合同の海浜学校を開いた。

「みんなで教会をつくろう」のテーマで、約40人の子どもたちが、みことばクラス、海水浴など、恵みのときを過した。なお8月9日10日は一関教会の海浜学校、8月10日から12日まで「真の幸福をさぐる」のテーマで、県内高校生の合宿が宮古教会で行われた。

二本松教会開設25周年

8月7日に銀祝記念祭

創立25周年を迎えた福島・二本松教会は8月7日、地元信徒のほか福島ドミニコ会地区の諸教会代表、修道女など50人以上が参加して銀祝の記念祭を行った。

9時30分からの感謝ミサは、主任司祭ユリアン神父、前任パウロ神父と共にドミニコ会

管区長ボオリウ神父が共同司式。ミサ後は伝道館で祝賀会が開かれた。

創設当時からのカテキスタ茂木節子さんが二本松教会の歴史と現状を話したが、信徒の努力によつて教会が建てられたと、当時のフォルジエト神父や信徒の苦勞を紹介。現在は小さな教会だが、信徒の信仰と結束は堅いの将来の発展を確信していると述べた。

教区最南の白河幼稚園

創立25周年を迎える会

福島県白河市にある白河カトリック幼稚園が、創立25周年の銀祝を迎えた。9月3日、教区長佐藤千敬司教を迎え、銀祝の式典および祝賀会を催す。

同幼稚園は教区的最南端にあるカトリック施設で、グアダルベ宣教会が司牧する白河カトリック教会に付設されている。しかしエズス孝女会が現場を担当、市内唯一のカトリック教育の場として、キリストの愛を地域社会につたえる役目を果している。

百三歳の細目さん、帰天

仙台市でいちばん長寿をたもっていた細目為(ほそのめ・まなぶ)さんがさる8月5日に死去、10日午後元寺小路教会で葬儀ミサが行われた。明治13年12月11日生まれのは教育者として生涯を過し、仙台白百合学園でも教鞭をとつたことがある。洗礼は一九六六年86歳のときで、仙台豊屋町教会所属。葬儀ミサは斎藤石雄神父が司式した。

教会財政を知ろう ①.....  
教会維持費について.....

先日の宮城県信徒大会で、元寺小路教会の青山龍雄さんが教会会計の話をした。教会財政の仕組がどうなっているか、信徒の責任はなにか、を訴えて理解をもとめたのである。さいきん教会の財政的自立がよくいわれるようになってきたが、まだまだ関心はうすい。ここでは、すべての信徒が自分の所属教会に、自分の収入に見合った金額を納入する教会維持費のことについて考えてみよう。

教会のあらゆる宗教活動はいうに及ばず、司祭や使用人の生活費、教会施設の修築および維持経費など、それらはすべて信徒が拠出

知っていますか？

“光ヶ丘研修所”



光ヶ丘研修所。教区にそんな施設があつたらうかといふかる人も多いだろうが、もちろん教区が正式につけた名ではない。何人かが願いをこめてひとつの建物をそう呼んだ。

司教館がある一帯は最近、東仙台六丁目と新町名になつたが、付近の丘には戦前からカトリック施設が多く、光ヶ丘と呼びならされてきた。その一角、司教館の構内に細長い木造モルタルの二階建の建物がある。

前教区長小林有方司教の時代、たぶん昭和35年ごろに建てられて、教区司祭の月例会、黙想会に利用されていた。そのうちどうして

する教会維持費で賄うのが本来である。

以前は布教援助金やミサ謝礼金など、外国の信徒の拠出金が寄せられていたが、現在はその金額も微々たるものになり、また外国の援助は期待すべきでないといわれている。しかも財源となる不動産も収益事業もない。いま必要なことは、教会を私たちの手で維持、発展させてゆくための教会維持費の確実な納入と増額ではないだろうか。

- ① 現在納入している維持費を、各自の努力でいくらかでも増額できないだろうか。
  - ② 維持費を納入しない信徒がないように、どんな工夫をしたらよいだろうか。
  - ③ 信徒がふえないと維持費もふえません。
- ◎ 意見を寄せて下さい。

か利用度が減り、仙台のあけの星婦人会が始めた老人ホームに転用され、あけの星荘といわれた。昭和46年ごろのことだろう。一昨年、あけの星荘が他に新築移転した後は、教区でその利用法を検討中ということになる。

宮城県沖地震による破損など、修理を必要とする個所もあるが、まだまだ十分に使える。現在は試験的に、各種グループでの使用が行われている。個室も和6、洋9、ホール、食堂(台所)などを備え、環境もよく閑静である。最近黙想や研修を行う場所の必要がいはれるが、十分それに応じられることが、ここ2年ほどの利用で分かった。教区にとつてかけがえのない信徒研修所ではないだろうか。お問い合わせは教区事務所三浦神父宛。



つい先日、親しい友人の急死にあい辛くて仕方なかった。52歳のY君は30年も昔、当時は仙台教区だった函館元町教会の青年会仲間であつた。そのころはまだ大学生で、いまま詰襟の学生服姿が眼に浮んでくる。

ほとんど毎日、教会に顔を出していたようだ。学生会、青年会、日曜学校、SVP、聖歌隊、毎週の教会報づくり。いつ学校にゆくんだらうと心配だったが、あとで大学教授(英語教育)になつたのだから、勉強の方もしつかりやつていたにちがいない。

その後の彼は学生時代と変わらず、いつも教会の中で実際に働いていたようだ。人なつこい彼は教会だけでなく、すべての人から親しまれ愛されて、通夜も葬儀ミサも元町教会始まって以来の人で埋まつた。

彼は高校時代に、亡くなつた平塚秀雄神父(仙台教区)から受洗した。30年におよぶ彼の信仰生活は、その師平塚神父に似てしつかりしたものだつた。教会と司祭に信頼し、偏らない正道をあるいたといえよう。彼を知る神父はみな異口同音に「全くいい男だつた」とY・山岸悦郎君の死を悼んだ。

(M)

特別聖年巡礼の旅  
郡山教会 訪問

福島・野田町教会



長びく梅雨がひとときの晴間を見せた7月24日、午前9時のミサ後に特別聖年の行事として郡山教会に巡礼を行いました。

7台の車に分乗したり、列車やバスを利用したりして主任司祭モリソン神父様以下40人あまり。途中ロザリオの苦しみの玄義をとるなどして午前11時30分、全員が郡山教会に到着しました。

息つくひまもなく聖堂に入って黙想。この日のために7月21日夜特別に痛悔のミサをささげ、ゆるしの秘跡にあずかるなどして心の準備をしてきました。やがてモリソン神父様による全免償の祈りがはじまり、一同は心をひとつにして唱和、信仰を証しました。

終つてから信徒館で郡山教会の信徒の方々の心づくしのお茶をごちそうになり、飾つてあつたまだヒゲを伸ばしていないモリソン神父様の写真を話題にしたりして、昔話に花を咲かせ、たのしい教会交流のひとつを過ぎました。

郡山からの帰りは母成(ぼなり)グリーン・ラインから土湯峠を越え、浄土平や高原牧場を回るなど、緑したたる夏山を満喫いたしました。子どもたちの走り回るすがたに、教会の未来を語り合つたりして、有意義な巡礼の一日でありました。(木戸 清吉)

「リーダーのためのキリスト教講座  
ワークショップ」に参加して

熊谷 みわ子 修道女

(オタワ愛徳会)

さる7月26日から29日まで、Gグリフィン神父、シスター吉田を講師とするカテケージスのワークショップが行われた。人間の創造性は限りなく豊かなものである。内に秘められているはかり知れない可能性に目覚めさせられながら、同時に人間の弱さ、惨めさを体験できたという意味で、この研修会に参加できたことは大きな恵みであった。「機会があるうとなかろうと宣教しなさい」という聖パウロの言葉に促されながらも、宣教のための手段を取らずにいた自分であった。

30人の受講者は熱弁をふるうリーダーによつて、朝から夜の9時まで沢山の講義を押し入れられ、ゆさぶり入れられた。一年コースの内容を短時間で習得しようというのだから、当然きびしさが伴うわけで、めいめい自分らムチ打ちながらの受講となった。

私たちは自分の知っていることをどうしても伝えたいと熱意にかられるあまり、相手の要望に耳を傾けたり、理解しようとする態度に欠けることがある。どんなに素晴らしいことでも、満たされない要求には無理に伝えられないし、また伝わりもしない。この戒めはこれからの宣教を方向づけるために、大きな宝となることだろう。

講座内容は三段階に分けられた。

第一―予備福音宣教：人間としての問題  
第二―クリグマ……：神の啓示のキリスト  
第三―カテケジス……：教会の教え

細かい項目ごとにエクササイズと復習があり、非常に実地的、具体的なものである。教える、伝えるの宣教姿勢から、学びつつ共に体験する宣教に変わってきたという感じがしてきた。「私たちは、もうあなたの話によつて信じるのではない。この耳で聞き、この方こそまことに世の救い主であることが分かったからである」――ヨハネ4章32節。

このような確信に到達することこそ、本当の宣教であり、豊かな実を結ぶものとなるのではないかと思つた。そして司祭も修道女も共に学び合う機会となつたことを感謝せずにはいられなかつた。

最後に、今回は研修会の場として、東仙台の司教館に隣接する旧あけの星荘の建物を利用してもらった。これからも研修会の場として、また黙想会の場として多くの方に利用されるよう、格好の場であることを紹介させていただきます。

おねがい

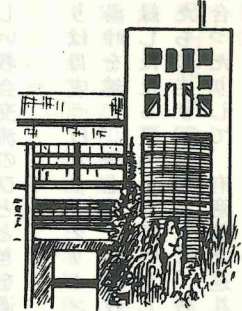
ニュースをください



地区や教会、修道院、施設、学校での出来ごと、催しもの、さまざまな話題など、どうぞ気がるにお知らせ下さい。ハガキに一筆、電話でもいいです。早速答えて下さった方がたに心から感謝します。これからもよろしくお願ひします。教区事務所の三浦神父まで。

# おらが教会 (35)

岩手・釜石教会



詩情ゆたかな岩手路を、花巻から急行で東に約1時間50分。遠野を過ぎ、北上山系の仙人峠を越えると、間もなく陸中海岸国立公園の中央部・釜石市に着きます。鉄と魚の街といわれる釜石駅に降りると、旅行者はまず駅前にそそり立つ煙突と煙りに驚くことでしょう。そうです。釜石は新日鉄釜石製鉄所に代表される鉄の街です。しかし近年は鉄鋼不況に伴う合理化などで、人口も活況期の3分の2に減ってしまいました。

この古くから栄えた鉄の街釜石における教会の歩みは、明治13年ごろに始まっており、盛岡四ツ家教会の巡回地として、年3回ほどパリ外国宣教会の司祭が、山を越え谷を渡り巡回してきたと記録されています。福音の種子はこのように多くの宣教師によつてこの地に蒔かれたのですが、その中から津浪のため釜石で殉職した若き宣教師ヘンリー・リスバル神父様のことを紹介します。

小野忠亮神父様は、「日本に貢献した宣教師(聖母の騎士昭51年3月号)」に次のように書

いています。リスバル神父様は明治29年6月13日、伝道士を伴つて沿岸地方巡回のため盛岡を出発。宮古まで2日かかり、途中信者宅で幼児に洗礼を授け、さらに盛町の信者に病油の秘跡を授けるため、雨の中を夜半に釜石に向い、翌15日の日暮れに釜石に着き港町の旅館に宿をとりました。お茶をもらい、出迎えた信者と話しているとき、突然大きな地震が起きました。間もなく午後8時19分、大砲のどろくような音がし、同時に「津浪だ、津浪だ」という宿の主人の声がありました。危険を感じた伝道士が神父様を促し、大雨の中を裏山に向つて走り出しました。走りながら振向くと神父様は走るのをためらつて、部屋に戻るようでした。「神父様はやく逃げて逃げて」とさけびながら、伝道士は夢中で裏山にかけ登りました。神父様は後から避難されたものと思ひ、夜明けを待ちました。しかし神父様の姿はありませんでした。津浪に吞まれてしまつて死体も見つかりませんでした。津浪によるその時の釜石の被害は、死者四千四十一人を数えています。

いま釜石教会の聖堂の階段の壁に、リスバル神父様の記念碑がはめ込まれています。そこにはラテン語で、「自分に世話を委ねられた信者を訪れたとき、釜石で突然おそろしい津浪にあい、大勢の人びとと共にこの世から去つた。一八九六年6月15日。29歳。」わたしは泥の深みに沈み、そこには足をかけるところもありません(詩編69・3)と記されています。

こうした歴史を経て、昭和25年に岩手県の宣教はスイスのベトレヘム外国宣教会に委ねられました。釜石には昭和26年、魚加工場の建物を利用した臨時の教会が建てられ、そして昭和37年現在地に、ヨゼフ・フーゲンツベルン神父様、エンデルレ神父様によつて聖パウロ釜石教会の新聖堂が献堂されました。エグロフ神父様を経て、昭和44年から現在の主任司祭ヨゼフ・シューマヘル神父様が司牧に当たっています。

神学博士の神父様は学者タイプですが、私たちにやさしく聖書を説かれ、特に聖書研究会や地区の家庭集會に力を注いでいます。典礼への積極的奉仕、子供たちへの教理など神父様の指導と信徒の奉仕で着実な歩みをつづけています。市内各派教会との一致運動、重症心身障害施設奉仕の婦人会のボランティア活動もあります。また神父様は聖光幼稚園の園長としても活躍しています。いま釜石教会は、特別聖年の恵の年に、「家庭から社会にキリストの平和を」という教区目標に向つて努力しているところです。

## 【編集後記】

(ルカ・山田秋穂)

8月になつたら毎日猛暑。その暑さの中、各地でキャンプなど行われているようです。事故のないよう祈るとともに、その成果が実つて召命の芽生え：と願わずにいられます。さて先日の呼びかけで、ハガキ通信を寄せられた教会がありました。感謝、感謝でいっぱいです。さらによりしく。(M)